

志^{しづ}津次郎^{じろう}と もののけ

文 加藤 志異 (かとうしい)
絵 中谷 靖彦 (なかややすひこ)
原作 及川 一耕 (おいかわいっこう)





この物語は
優しさと勇気、そして過ちと反省の大切さを
子供たちに伝えるために
臼井の円応寺に伝わる伝承に基づきながらも
現代に創作されたおはなしです。
志津次郎ともののけの不思議な関わりが
このお話しにふれた子供たちや私たちの心に残り
未来に伝わることでしょう。

志津次郎とものけ「原作」

時は鎌倉時代、志津にある小さくも美しい志津城には、志津次郎胤氏という城主が住んでいました。ある夜、志津次郎は森で見慣れない風体の者に出会いました。志津の民ではないな、どうしたのかと不思議に思った志津次郎が声をかけてみるとその者は人のなりをしたもののけの類で、人ではありませんでした。頭巾の下には隠しきれない角か耳の大きなふくらみがあったのです。

「お前はもののけだな、どうしたのだ」「足が痛くて動けないのです」そのもののけは足を痛めて歩けずに困っていました。志津次郎は勇敢で優しい心を持っていたので、この者を助けることに決めました。足を手当てし、仲良く話をしました。「ニコ」と名乗るもののけは、笑うことができないもののけであること、そのかわり自分以外の者が笑うのが大好きでそのためには善悪関係なく不思議な力を使うことができることなどを話してくれました。やがて足の痛みが和らいだもののけは無表情ながらもとても喜び、志津次郎にお礼がしたいと言いました。

もののけの申し出に志津次郎は、軽い気持ちで「一度でいいから今より大きなお城に住んでみたいな」とニコニコしながら言いました。もののけは、ニコニコ笑っている志津次郎をみて大きくうなづき、やがて森の奥へ去って行きました。それ以来志津次郎は豊かなる志津の地を治め、多くの領民たちに囲まれながらより大きな城の城主になる願いを抱くようになりました。



季節がひとつ変わる頃、志津次郎のもとに便りが届きます。白井城主である兄が病に倒れたというのです。床に伏せる兄は「幼い息子のめんどろをみるため白井城にきてくれ」と言い残し亡くなってしまいました。兄の子はまだ幼く、成人前の3歳でした。そこで、志津次郎は兄の遺言に従い、その子が成長するまでの間、白井城を守るようになりました。

そしてまた季節が移る頃、あの時助けたもののけが志津次郎の前に現れました。「願いが叶ってよかった」それを聞いた志津次郎はハッとしました。兄の死はもののけの仕業だったのか。なんとということだ、私が大きな城に住みたいと言ったばかりに。

もののけは志津次郎の知らないうちに兄の子までを亡きものにしようとします。なぜならそれが「大きなお城に住んでみたい」という願いを本当に叶えることになるからです。しかし、その画策に気づいた白井城の支城である岩戸城の岩戸五郎が山伏に変装して兄の子の脱出を成功させました。

白井城主となった志津次郎は、もののけの力を過信してしまいました。彼は家臣を頼らず、領民の声を聞かず、もののけの不思議な力だけで問題を解決しようとしたのです。

やがて、兄の子は成人し、名を白井興胤と改め、足利尊氏に仕えて功績をあげ、白井城に戻ることを認められます。命令を受けた志津次郎は表向きは兄の子の復帰を喜びつつ白井城を明け渡し志津城に戻りました。しかし、もののけは志津次郎へのお礼が台なしにされたことに腹を立て、志津次郎を白井城主にしようとしました。

志津次郎はもののけの力に頼った過去の行動を後悔しました。優しく地域の人々のために尽くすことの大切さを悟ったのです。

時すでに遅し、最後は白井興胤に志津城を攻められてしまいました。

この時、もののけは志津次郎に「兄の子興胤を亡き者にしましょうか」と言いました。

「もののけよ、よく聞くのだ。興胤を殺めても私は笑うことはない。むしろ悲しいのだ」

「あなたへのお礼のつもりでしたが違った方へ行ってしまうでしたね、すみません」もののけは謝り、森の奥へ消えていきました。

志津次郎は自らの過ちを悔い志津の民の幸せを願いながら、城主として潔く最期をむかえました。

おわり

原作 志津駅南口商店会

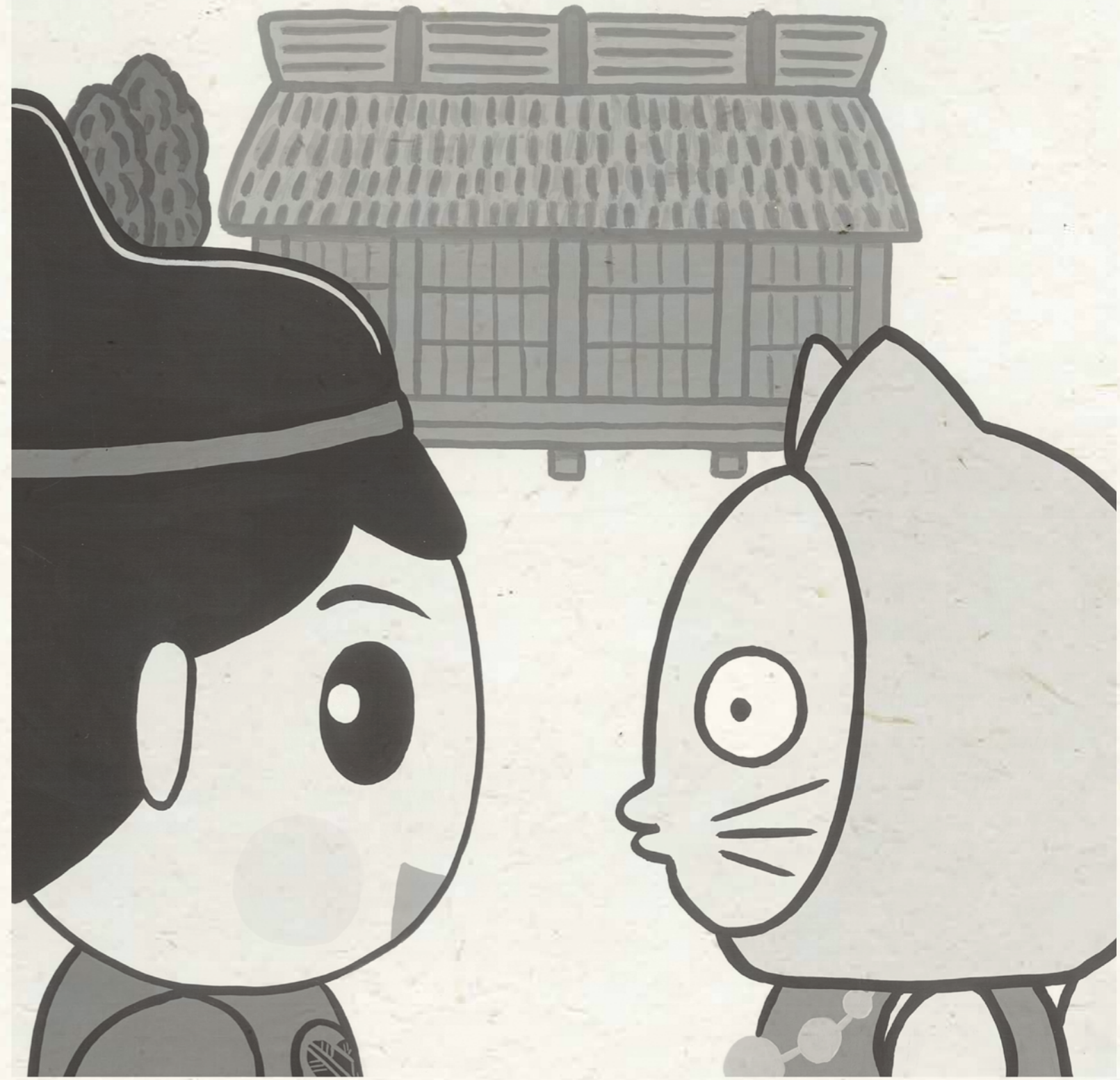
及川一耕

加藤志異

志^{しづ}津次郎^{じろう}と もののけ

文 加藤 志異 (かとうしい)

絵 中谷 靖彦 (なかややすひこ)



とき かまくら むろまちじだい
時は鎌倉・室町時代

しづ ちい うつく しづじょう
志津にある小さくも美しい志津城には
しづじろう じょうしゅ す
志津次郎という城主が住んでいました。



ある夜、志津次郎は
森で見慣れない風体のものに出会いました。
志津の民ではないな、どうしたのかと
不思議に思った志津次郎が声をかけてみると



もの
その者はもののけで、
ひと
人ではありませんでした。
ずきん した
頭巾の下に
つの みみ おお
角か耳の大きなふくらみが
あったのです。

あし いた うご
「足が痛くて動けないのです。」

まえ
「お前はもののけだな、
どうしたのだ。」



しづじろう ゆうかん
志津次郎は勇敢で
やさ ころも
優しい心を持っていたので、
たす き
もののけを助けることに決めました。



あし てあ
もののけの足を手当てして、
はな
話しかけました。

なの
ニコと名乗るもののけは、
わら
笑うことができませんでした。
ほか ひと わら だいす
でも、他の人が笑うのは大好きで、
ふしぎ
そのためなら不思議な
つか
ちからを使うことが
はな
できると話してくれ
ました。

あし あし
足の痛みがなおったもののけは とても喜び、

しづじろう れい
志津次郎にお礼がしたいと言いました。

しづじろう かる きも
志津次郎は軽い気持ちで

いちど いま おお しろ
「一度でいいから今より大きなお城に
す
住んでみたいな。」

とニコニコ

しながら
い
言いま

した。



もののけは

しづじろう
ニコニコ笑っている志津次郎をみて

おお
大きくうなづき、

もり おく かえ い
森の奥へ帰って行きました。

いらい しづじろう
それ以来 志津次郎は
ゆた しづ ち おさ
豊かなる志津の地を治め、
おお りょうみん かこ
多くの領民たちに困まれながら、
いま おお しろ じょうしゅ ねが
今より大きな城の城主になる願いを
いだ
抱くようになりました。



きせつ か ころ しづじろう
季節がひとつ変わる頃 志津次郎のもとに

たよ とど
便りが届きました。

うすいじょう じょうしゆ あに やまい たお
臼井城の城主である兄が病に倒れたと

いうのです。



とこ ふ あに
床に伏せる兄は
おさな むすこ こうけんにな
「幼い息子の後見人となり

うすいじょう い のこ
臼井城にきてくれ。」と言ひ残し

な
亡くなってしまいました。

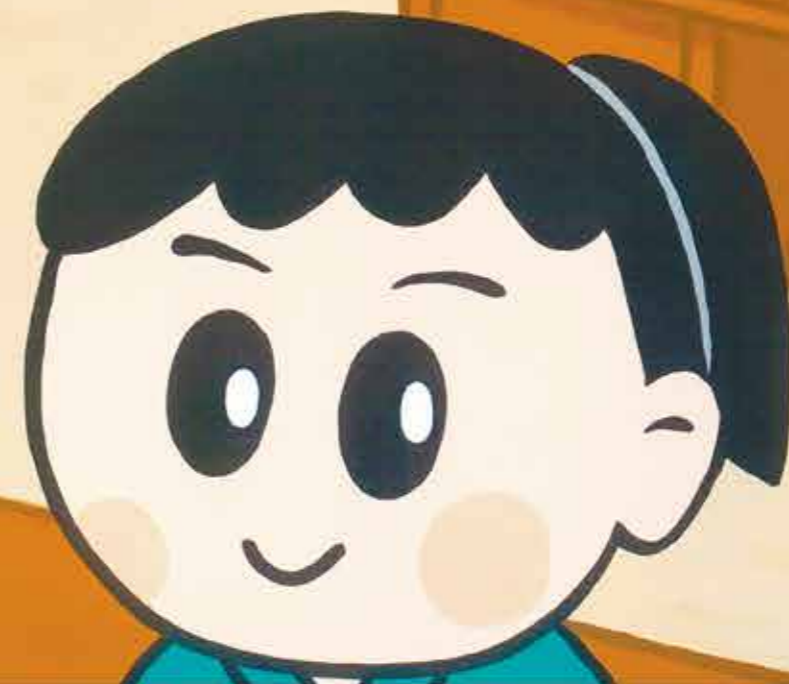


あに こ おさな せいじんまえ さんさい
兄の子はまだ幼く、成人前の3歳でした。

しづじろう あに ゆいごん
そこで、志津次郎は兄の遺言どおり

うすいじょう あるじ あいだ
臼井城の主になり、しばらくの間、

あに こ か
兄の子の代わりに
うすいじょう まも
臼井城を守ることになりました。



そしてまた季節が移る頃、

もののけが志津次郎の前に現れました。

「願いが叶ってよかったですね。」

それを聞いた志津次郎はハッとしました。

「兄の死はこのもののけの仕業だったのか。」

「私が大きな城に住みたいと言ったばかりに。」



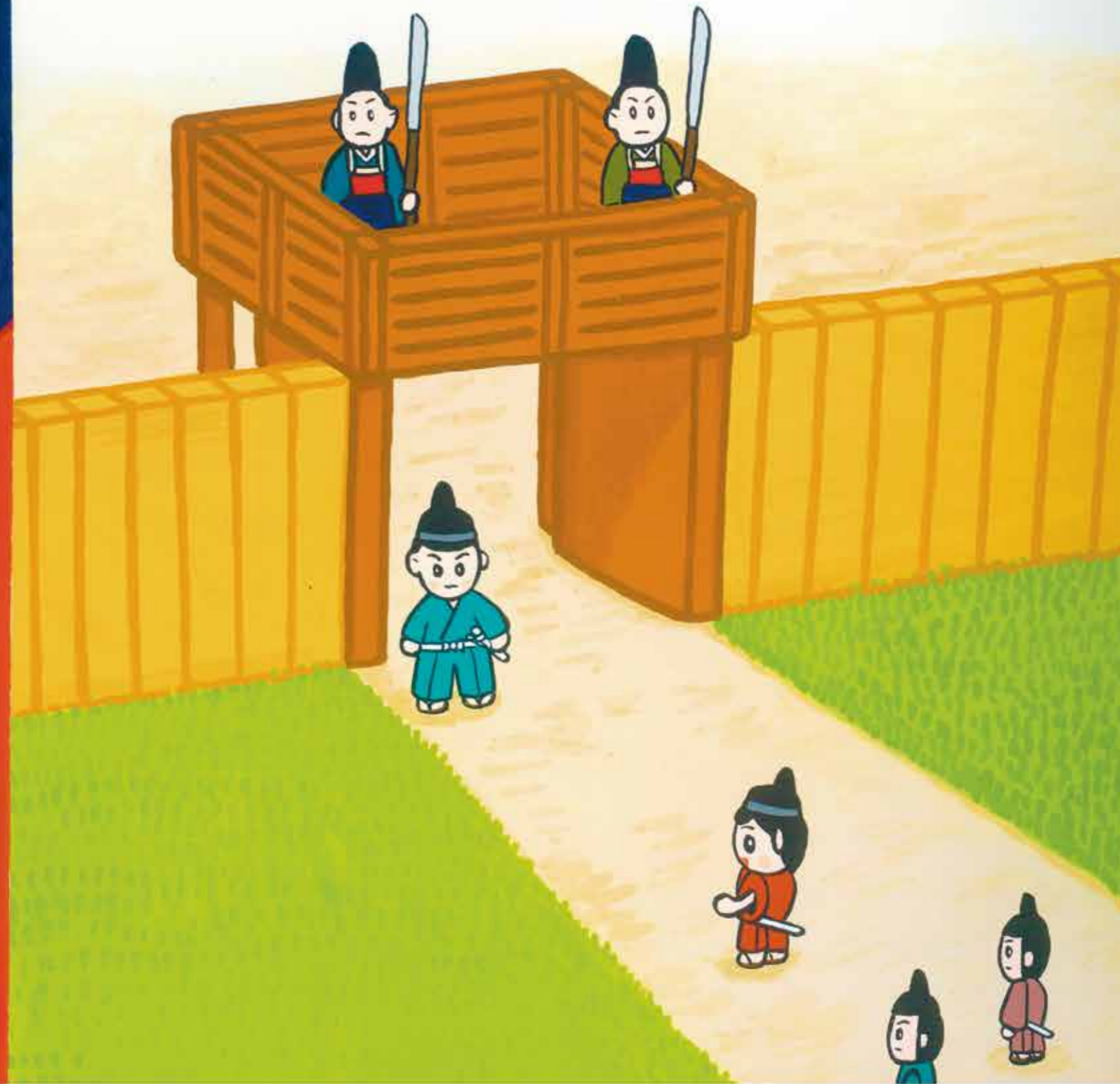
しづじろう し
もののけは志津次郎の知らないうちに、
あに こ な
兄の子までも亡きものにしようとしています。

かくさく き
しかし、その画策に気づいた
いわとじょう いわとごろう やまぶし すがた
岩戸城の岩戸五郎が山伏の姿になって、
あに こうすいおきたね
兄の子臼井興胤を
だっしゅつ
脱出させました。



めいじつ うすいじょうしゅ しづじろう
名実ともに臼井城主となった志津次郎は、
ちから かしん
もののけの力を過信するようになりました。
かれ かしん りょうみん たよ
彼は家臣や領民に頼らず、
ちから もんだい
もののけの力だけで問題を
かいけつ
解決しようとしたのです。

あに こうすいおきたね せいじん あしかがたかうじ
やがて、兄の子臼井興胤は成人し、足利尊氏の
めいれい うすいじょう もど みと
命令により臼井城に戻ることを認められます。
しづじろう おもてむ ふっき よろこ
志津次郎は表向きは復帰を喜び、
うすいじょう あ わた しづじょう もど
臼井城を明け渡して志津城に戻りました。



しかし、もののけは

しづじろう れい ほご
志津次郎へのお礼が反故にされたことに

はら た しづじろう ふっけん
腹を立て、またもや志津次郎の復権を

かくさく
画策します。



しづじろう ちから たよ
志津次郎はもののけの力に頼ってしまった。

かご こうどう こうかい
過去の行動を後悔しました。

やさ ゆうかん しづ ちいき ひとびと
優しく勇敢に志津の地域の人々のために

つく たいせつ
尽くすことの大切さを

いまになって
さと
悟ったのです。



とき おそ さいご しづじろう
時すでに遅し、最後は志津次郎の
いじょう しづじょう せめ
居城である志津城を攻められてしまいました。

しづじろう
もののけは志津次郎に
あに こおきたね ころ
「兄の子興胤を殺しましょうか？」と
い
言いました。



き
「もののけよ、よく聞くのだ。」

おきたね ころ わたし わら
興胤を殺しても私は笑うことはない。

かな
むしろ悲しいのだ。」

れい
「あなたへのお礼のつもりでしたが

ちが ほう い
違った方へ行ってしまいましたね、

あやま
ごめんなさい。」もののけは謝り、

もり かえ
森へ帰って行きました。



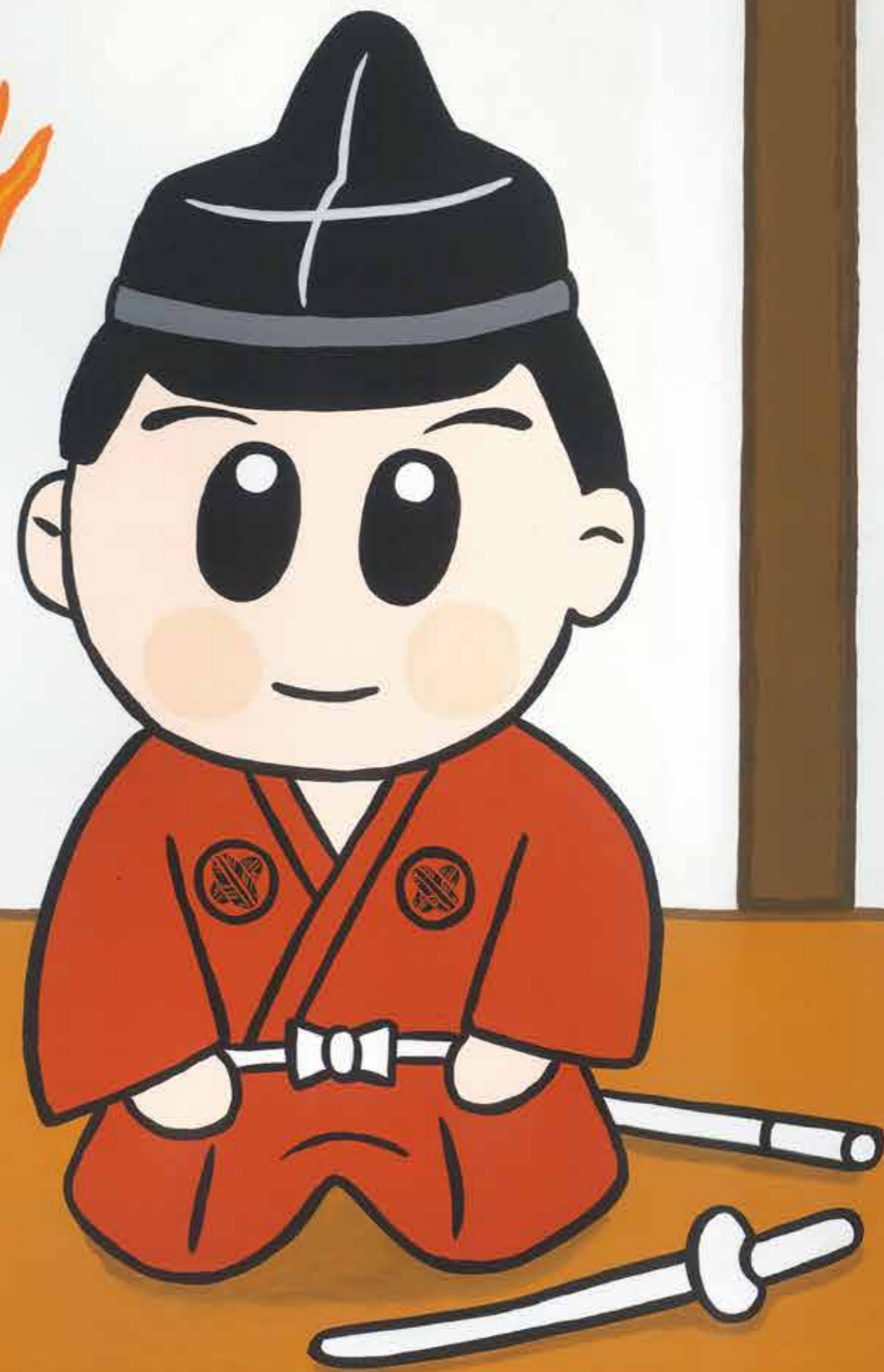
しづじろう
志津次郎は

みづか あやま く
自らの過ちを悔いながら、

おきたね
興胤や

しづ ひとびと しあわ
志津の人々の幸せを

ねが さいご むか
願い最期を迎えました。





ものがたり やさ ゆうき
この物語は、優しさと勇氣、

あやま はんせい たいせつ
そして過ちと反省の大切さを

こども つた
子供たちに伝えるために

しじつ もと げんだい
史実に基づきながらも現代に

そうさく
創作されたおはなしです。

しづじろう
志津次郎ともののけの

ふしぎ きずな はな
不思議な絆がこのお話しにふれた

こども わたし ところ のこ
子供たちや私たちの心に残り

みらい つた
きっと未来に伝わることでしょう。

志津次郎と もののけ



加藤 志異 (かとうしい)

1975年岐阜県生まれ。妖怪絵本作家。
早稲田大学第二文学部卒業。
絵本の作に「ぐるぐるぐるぼん」(文溪堂)
「せかいいちたかいすべりだい」(大日本図書)など。
主演映画『加藤くんからのメッセージ』が
全国各地で上映。妖怪になるのが夢。

中谷 靖彦 なかややすひこ

富山県出身。桑沢デザイン研究所卒業。
第25回講談社絵本新人賞を受賞。
絵本に「おさるのパティシエ」(小学館)、
「だんごたべたいおつきさま」(ほるぷ出版)、
紙芝居に「ばけこちゃんシリーズ」(童心社)など。

志津次郎ともののけ

文 加藤志異 絵 中谷靖彦

2024年2月23日 初版

原作者 及川一耕
発行者 志津駅南口商店会
デザイン 及川一耕

本書の一部あるいは全部を無断で複写複製する
ことは、法律で定められた場合を除き著作権の
侵害になります。

